

散文と詩歌にまつわる語句の由来

河野庸二

はじめに

文学作品、さらにはもっと範囲を広げて、文芸、映画、漫画、詩歌と呼ばれるジャンルまでを含め、それらを出典とする語句にまつわる来歴を一本にまとめ、各項目をアルファベット順に配列してみた。散文作品と詩歌にまつわる語句の由来—それはまさしく文学と言語学の接点と考えられようが、それは文学、言語学の両方に関心をもつ筆者の最も得意とする領域でもあり、深入りすればするほど、そこには興味津々たるエピソードが満ちあふれていることがわかる。筆者はこれまでも『語源再考』あるいは『語源覚え書き』のなかに同工異曲の内容のものをたびたび発表してきたが、それと重複するテーマについては、今回大幅に改訂を加えて稿を改めた。

After you, my dear Alphonse

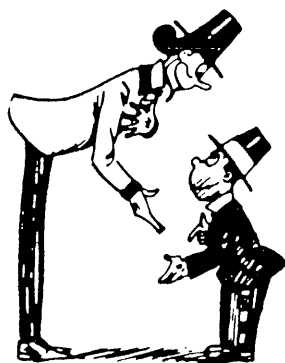
この phrase が今世紀初頭に活躍したアメリカの漫画家フレデリック・バー・オPPER Frederick Burr Opper (1857-1937) の連載漫画 “Alphonse and Gaston” に由来すること、エリック・パートリッジ Eric Partridge の著書⁽¹⁾にも言及されていること、名作 “The Lottery” の作者として知られるアメリカの女流作家シャーリー・ジャクソン Shirley Jackson 作の “After You, My Dear Alphonse” と題する短編が存在すること、さらにはモリス夫妻の『語源句源辞典』を引用したうえで、“pull Alphonse and Gaston” という表現が「2人の野手がフライを互いに譲り合って捕球しそこねるケース」を指す放送用語としても用いられることについても、以前発表した論文のなかですでに指摘しているので、今回はその後入手した資料から得た新情報を中心に報告しようと思う。

テネシー州立大学マーティン校の附属図書館の蔵書のなかに大型本のアメリカ漫画史があり、耳寄りな情報はそこから見つかった。そこにはこの新聞連載漫画についての、モリス夫妻よりも詳しい記述が出ていたのである。

...and Frederick Burr Opper's Alphonse and Gaston ("After you, my dear Alphonse." "No, after you, my dear Gaston," etc.) became synonymous with overdone politeness. (p. 23)⁽²⁾

...*Alphonse and Gaston*, a short-lived Sunday newspaper feature of 1902-1904 by Frederick Burr Opper who dropped them to devote more attention to his better known strips *Happy Hooligan* and *Maude the Mule*. The two are extremely polite Frenchmen who have carried good manners to such an extreme that they are both immobilized and unable to act as disaster occurs around them: "You first, my dear Alphonse!" "No, no—you first, my dear Gaston!" They reside more in the popular consciousness and language as representatives of excessive politeness rather than as comic strip characters. (p. 97)⁽²⁾ (下線筆者)

かつて筆者は情報不足から漫画がどんな内容であるかがよくわからないまま、この漫画について、「二人のフランス人が事あるごとに互いに先を譲り合う可笑しさがうけてついには流行語にまでなった」と書いた。しかし考えてみるとただそれだけでは漫画の面白さは不十分である。「互いに先を譲り合ううちにとんでもないことが起こる」からこそ読者にうけたのであろう。いま一つはこの漫画が1902年から1904年にかけて日曜版に連載されていたこと、作者のオPPERは漫画としてはもっと有名な *Happy Hooligan* や *Maude the Mule* のほうに力を注ぐためにこの漫画の連載をやめたということである。ところでアルフォンスとガストンがどのような姿で描かれていたかについても、同書に掲載された一葉で明らかになった。いかにも初期の漫画らしく絵そのものはまったく洗練されていない。そして実際この2人のフランス人は要するに漫画のキャラクターとしてよりも、むしろ常套語句の中で記憶されているのである。



catbird seat

アメリカの humorist ジェームズ・サーバー James Thurber (1894-1961) の短編集 *The Thurber Carnival* (1946) の中の 1 編 “The Catbird Seat” は短編アンソロジーにも採られるほどの傑作で、作者の代表作の一つである。ちなみにこの作品は邦訳の『ニューヨーカー短篇集』（早川書房刊）ではタイトルが『つぐみの巣ごもり』と訳されているが、いずれにしても作品を一読しないことには表題の意味ははっきりしない。ところが既述のモリス夫妻の辞書はサーバーを引用しながら懇切丁寧にこの語句を解説しているので、原作を知らない者でもこれを一読すれば題名の由来を理解することができるのである。

The best explanation of the phrase *in the catbird seat* was given by James Thurber in a story titled “The Catbird Seat,” which appears in his book *The Thurber Carnival*. In it a mild-mannered accountant is driven to the point of contemplating the murder of a fellow employee because she continually heckles him with silly questions like: “Are you lifting the oxcart out of the ditch?” “Are you tearing up the pea patch?” And of course, “Are you sitting *in the catbird seat*?” One of the meek man’s fellow employee explains: “She must be a Dodger fan. Red Barber announces the Dodger games and he uses these expressions — picked them up down South. ‘Tearing up the pea patch’ means going on a rampage; ‘sitting *in the catbird seat*’ means sitting pretty, like a batter with three balls and no strikes on him.”⁽³⁾

生真面目で虫一匹殺さぬような経理担当社員が、パーティーの席で社長を危難から救ったとやらで社長から special adviser として迎えられた女から口うるさくつつかれる。女の連発する一連のわけのわからぬたわ言も耳障りでならない。たまりかねた彼はついに彼女を「消し去る」ことを決断する。自分が謹厳実直で通っていることを巧みに利用してやがて彼は計画を実行に移しまんまと成功するのだが、捨てぜりふとして彼女のお株を奪って罵詈雑言を浴びせて立ち去るのである。

“I’m sitting in the catbird seat.” (ああ、ほんとにいい気分だぜ。)

“in the catbird seat”は熟語として普通の英和辞典にも出ており、訳語は「有利な立場で」となっている。つまりサーバーの短編に書いてあるとおり、「ノー・ストライク、スリー・ボールのときのバッターのような立場」を指すのであろう。

the golden apples of the sun

絢爛たるイメージをもつこの一句は、今世紀最大の詩人という評価がなされるアイルランドの詩人 W. B. イェーツ W. B. Yeats (1865-1939) の初期の詩集 *The Wind among the Reeds* 『葦間の風』の中の一編、“The Song of Wandering Aengus” 『彷徨えるイーンガスの歌』の最終行である。この詩はアイルランド神話における愛の神イーンガスに事寄せた、憂国の美女モード・ゴン Maud Gonne へのかなえられぬ愛の懊悩の発露であると同時に、アイルランド民話、ギリシア神話、アイルランド神話の三要素を渾然一体化させながら、なおかつ simplicity を保ち、平明な詩句の中に神韻漂渺とした雰囲気をかもし出している比類のない作品であり、当然引用されることも少なくない。そしてとりわけこの最終行は有名である。例えば、先年国際的な大ベストセラーとなったアメリカのノベルで、ロバート・ジェームズ・ウォラー Robert James Waller (1939-) の作家としての処女作『マディソン郡の橋』*The Bridges of Madison County* の中でも、この詩は主人公と女主人公を結びつける重要な小道具として使われている。アイオワ州にいくつか残存する屋根つきの橋を取材にきた「ナショナル・ジオグラフィック誌」のカメラマンと地元の一農家の主婦の偶然の出会いと4日間の愛の燃焼を描くこの作品が、ありきたりの不倫小説とは一味ちがう、むしろ純愛を高らかにうたいあげた作品として絶大な好評を博したことは記憶に新しい。ロバート・キンケードとフランチェスカ・ジョンソンは、出会いのときから何となく気どころの通い合った二人ではあったが、会話の中でたまたま男がイェーツのこの詩の一節を引用したことからさらに意気投合する。女の夫と二人の子供たちはステートフェアの品評会に牛を展覧するため州外にでかけて外泊中だった。

He looked upward, hands in his levi's pockets, camera hanging against his left hip. “The silver apples of the moon/The golden apples of the sun.” His midrange baritone said the words like that

of a professional actor.

She looked over at him. “W. B. Yeats, ‘The Song of Wandering Aengus.’”

“Right. Good stuff, Yeats. Realism, economy, sensuousness, beauty, magic. Appeal to my Irish heritage.”⁽⁴⁾ (下線筆者)

そして男につつましやかな夕食を供していったん別れたのち、今度は女のほうと同じ詩の一節を引用した誘いのメモを、男が撮影に来るはずの橋に残して立ち去るのである。

“If you’d like supper again when ‘white moths are on the wing,’ come by tonight after you’re finished. Anytime is fine.⁽⁴⁾ (下線筆者)
(もしも<白き蛾の舞い出づるころ>もう一度夕食をお望みでしたら、今夜仕事が終わってからおいでください。お待ちしております。)

一方、幻想SFの大御所とされるアメリカのレイ・ブラッドベリ Ray (Douglas) Bradbury (1920-) の短編集 *The Golden Apples of the Sun* (1953) 『太陽の黄金の林檎』はこの作家の最も実り多き時期 (1945-1955) の真っ只中に書かれた短編22編を集めたものであり、タイトルはその巻末に掲載された表題作によるものである。ところで表題作となった “The Golden Apples of the Sun” はギリシア神話の quest for the golden apples; Prometheus; Icarus の話を下敷きにした典型的な SF ファンタジーである。宇宙ロケット「コパ・デ・オロ (黄金杯)」号は太陽のかけらを地球に持ち帰らんと、太陽を目指してまっしぐらに突進する。

“South,” said the captain.

“But,” said his crew, “there simply aren’t any directions out here in space.”

“When you travel on down toward the sun,” replied the captain, “and everything gets yellow and lazy, then you’re going in one direction only.” He shut his eyes and thought about the smoldering, warm, faraway land, his breath moving gently in his mouth. “South.”

Their rocket was the *Copa de Oro*, also named the *Prometheus*

and the Icarus, and their destination in all reality was the blazing noonday sun. In high good spirits they packed along two thousand sour lemonades and a thousand white-capped beers for this journey to the wide Sahara. And now as the sun boiled up at them they remembered a score of verses and quotations:

“The golden apples of the sun’?”

“Yeats.”

“Fear no more the heat of the sun’?”

“Shakespeare, of course!”

“Cup of Gold’? Steinbeck. ‘The Crock of Gold’? Stephens. And what about the pot of gold at the rainbow’s end? *There’s* a name for our trajectory, by God. Rainbow!”

“Temperature?”

“One thousand degrees Fahrenheit!”⁽⁵⁾ (下線筆者)

上の引用はその冒頭の一節である。ブラッドベリはイエーツの詩句を借用してはいるものの、そこにはケルト的色彩は全く感じられず、したがってイエーツ的な要素が完全に排除されて純粹にギリシア的色彩に彩られたイメージに転換されているというか、イエーツの詩篇の中に盛り込まれたギリシア的要素だけが抽出されて用いられていることがわかる。

many-splendored thing

イエーツの ‘the golden apples of the sun’ と同様、英詩を出典とする語句に ‘many-splendored thing’ がある。もっとも ‘many-splendored’ という語を載せている英語辞典は皆無といってよい。そういう実状があるなかで、ひとりモリス夫妻の『語源句源辞典』だけが many-splendored thing の項を設けていることが注目される。

Love Is a Many-splendored Thing was the name of a film and the film was based upon an earlier novel. But the novel took its title from a poem by Francis Thompson, first published in 1913. Titled “The Kingdom of God,” it has a verse that ran: “The angels keep thier ancient places:/Turn but a stone and start a wing!/'Tis ye,

'tis your estranged faces,/That miss the *many-splendoured thing*.”
Note that Thompson, being British, spelled it “splendoured.”⁽³⁾

つまりこの語を一躍世に広めたのはそれをタイトルに使った小説であり、さらにはその映画化されたもの（邦題は『慕情』）であるが、実際に最も大きく寄与したのは映画そのものよりもむしろその主題歌であったに違いない。名旋律に乗って大ヒットし、さほど内容のないこの映画を大ヒットさせたのももちろんこの主題歌であった。そして映画、主題歌ともタイトルは *Love Is A Many-splendored Thing* である。ちなみに小説のほうのタイトルは *A Many-splendored Thing* であり、作者名は Han Suyin である。映画は1949年から50年の香港を舞台に描かれるメロドラマで、病院に勤務する英中混血の女医ハン・スーインとアメリカの新聞記者マーク・エリオットとの悲恋物語である。ヒロインの名前から察せられるように、原作はおそらく autobiographical なのであろう。折から勃発した朝鮮動乱に従軍して男は命を落とすことになるのだが、束の間の幸福とはつゆ知らず、主役の2人がマカオのホテルでおち合って恋のよろこびに酔いしれる一場面は、2人の運命を暗示するダイアログも含まれた、まさしくこの映画のクライマックスであると同時に、対話を通してタイトルの出典が明らかにされるという意味でもきわめて重要なシーンである。音声多重で放映された『慕情』から当該の場面を原語版と日本語版を併せて紙上に再現することにする。

Suyin: Oh, pity the poor people with their sad faces who missed our weal.

Mark: You know, I was thinking last night of them, lines in Thompson's poem. "'Tis ye, 'tis your estranged faces,/That miss the many-splendored thing.”

Suyin: I'm so happy it frightens me. I have a feeling that happiness or fairness is preparing for you and for me a great sadness because we have been given so much.

Mark: Darling, whatever happens, always remember: nothing is fair nor unfair under heaven.

スーイン：ああ、恋を失って悲しい顔をした人たちがほんとうにかわいそうだわ。

マーク： トンプソンの詩の最後の行に――昨夜思い出していたんだ。

「この世で一番すばらしいものを失うのは、お前だ、お前の冷たい顔だ。」

スーイン：あまり幸せすぎで心配だわ。神様が嫉妬して、きっと私たちに大きな悲しみをお与えになるような気がするの。あんまり幸せを与えすぎたから。

マーク： スーイン、どんなことがあっても忘れちゃいけない。神は決して意地悪なことはなさないんだ。

Matilda

オーストラリアで「奥地居住者の肩に下げる合切袋」が女性の名で呼ばれるのはわかるとしても、なぜことさらに「マチルダ」でなくてはならないかについては、かのブルワーの『故事伝説辞典』のアイバー・H・エバンズによる改訂版でさえも「はっきりしない」と匙を投じている。今やオーストラリアの国民歌であり、かつてアメリカ映画『渚にて』の中で主題歌的に使われてわが国でも一躍有名になったあの“Waltzing Matilda”の「マチルダ」である。但し to waltz Matilda (マチルダとワルツを踊る) が「放浪の旅をする」を意味するオーストラリア英語の一連の表現のうちの一つであることは同書の Waltzing Matilda の項の記述から明らかである。また、「ワルツを踊る」が一步一步の足取りにつれて袋が揺れるさまを言い表していることも同書は教えてくれる。

An Australian phrase made famous by the Australian poet A. B.(Banjo) Paterson (1864-1941). It means carrying or humping one's bag or pack as a tramp does. Henry Lawson (The Romance of Song) says, "Travelling with SWAG in Australia is variously and picturesquely described as 'humping bluey', 'walking Matilda', 'humping Matilda', 'humping your drum', 'being on the wally'..."

The reason for the tramp's roll being called a "Matilda" is obscure; "to waltz" conveys the impression of tramping along with one's pack jogging up and down with one's steps.⁽⁶⁾ (下線筆者)

ところが、ジョゼフ・T・シップレーはその大著『英単語の起源』の

magh (印欧語根) の項の中でこの女性名に触れ、あたかもブルワー辞典の問いかけに答えるかのような指摘をしている。

The name *Matilda*: mighty in battle, well illustrates how a word may shift its meaning. Shortened to *Maud*, it was, says OED, “applied typically to a woman of lower class.” It developed the pet names *maukin* and *malkin*, usually used of a slattern or a wanton; from the 13th c. through the 18th, these were also applied to a demon or a witch; *Macbeth* begins: “I come, Gray-Malkin!” (the witch’s cry to her familiar spirit). By *l.r* shift came *merkin*, shifting from the lewed woman to her pubic hair. (中略) Finally, the pox having left so many prostitutes bald below, *merkin* came to mean “a wig for a woman’s privy parts.” The Australians still sing of “Waltzing Matilda.”⁽⁷⁾ (下線筆者)

つまり、変幻自在な意味変化の実例としてゲルマン語系の女性名 *Matilda* をとりあげ、「<戦いにおいて勇猛な>を意味するこの女性名が *Maud* と短縮されて下層階級の女を指す名となり、さらにその愛称形から出た *mawkin*, *malkin* が不品行な女を指し、13世紀から18世紀にかけては魔女の呼び名として用いられていた。さらに l 音と r 音の交替が起こって *merkin* という形が生まれ、『みだらな女』の意味から『その陰毛』の意味に変わり、ついには梅毒のために陰毛を失った売春婦が多かったことから、*merkin* は『陰毛のためのかつら』を意味するに至った。」というのである。とどめの一句である *The Australians still sing of “Waltzing Matilda.”* は甚だ意味深長であるが、「*Matilda* という女性名には今なお『腰軽女』というニュアンスが残存している」というのがシップレーが言わんとするところであるとすれば、“*Waltzing Matilda*” よりもむしろカリプソ歌手として売り出したハリ・ベラフォンテの十八番である“*Matilda*” のほうを例にとるべきではなかったか。「マチルダ、マチルダ、あの女は俺の金を持ってベネズエラへ逃げて行ってしまった」という歌詞が端的にそのことを示している。

*Matilda, Matilda, Matilda, she take me money and run
Venezuela.*

Swanee

作曲家であると同時に作詞家でもあったアメリカのスティープン・コリンズ・フォスター Stephen Collins Foster (1826-1864) の名曲 “Old Folks at Home” 『故郷の人々』に歌われて人口に膾炙する「スワニー川」は厳密にいうと現存しない。フォスターがモデルにした実在の川は2音節語の「スワニー」Swaneeではなく、3音節語の「サワニー」Suwanneeだったからである。さいわいこの歌の成立に関しては参考文献が残っていて、それらを総合すれば、ある程度ことの真相が浮かび上がってくる。一つはスティープンの兄モリソン・フォスターが書いたフォスターの伝記である。もっともそのモリソンの記述には詳細部においていささか不正確なところがあることは否めない。

One day in 1851, Stephen came into my office, on the bank of Monongahela, Pittsburgh, and said to me, “What is a good name of two syllables for a Southern river? I want to use it in this new song of ‘Old Folks at Home.’” I asked him how Yazoo would do. “Oh,” said he, “that has been used before.” I then suggested Pedee. “Oh, pshaw,” he replied, “I won’t have that.” I then took down an atlas from the top of my desk and opened the map of the United States. We both looked over it and my finger stopped at the “Swanee,” a little river in Florida emptying into the Gulf of Mexico. “That’s it, that’s it exactly,” exclaimed he delighted, as he wrote the name down; and the song was finished, commencing “Way Down Upon de Swanee Ribber.” He left the office, as was his custom, abruptly, without saying another word, and I resumed my work.⁽⁸⁾ (下線筆者)

フォスターの手帳に残された草稿と照合してみると、意外なことに、モリソンの記述との間に微妙な食い違いがあることに気づくのである。

Way down upon de Pedee ribber
Far far away
Dere’s where my heart is turning ebber

Dere's wha my brudders play

まず上のような書きかけの未定稿の Pedee に下線があって作者がすでに気にしていることを暗示し、そのすぐあとに次のような一節が現れる。これはまさしく正式な歌詞の first draft であり、しかもそこには初案の河川名 Pedee を Swanee に改めた跡が歴然と残っている。

Swanee

Way down upon de Pedee ribber
Far, far away
Dere's where my heart is turning ebber
Dere's where de old folks stay
All up and down de whole creation
Sadly I roam
Still longing for de old plantation
And for de old folks at home

フォスター直筆の草稿というれっきとした物的証拠が存在するからには、2つの資料の間に食い違いが見られるときには、兄モリソンによる伝記の記述のほうの信憑性を疑わざるを得ない。モリソンによれば、「最初、別の河川名 Yazoo を提案したところすでに使ったことがあるとして却下され、改めて Pedee を提案したがこれまた気に入られなかった」ことになっている。またモリソンは Swanee を実在する河川名として書いており、歌詞に合うように2音節語に変えるために弟スティーブンが Suwannee のつづりを Swanee に改めたことについては一言も言及していない。ところで『語源句源辞典』の著者モリス夫妻は、この歌の成立の経緯を次のようにまとめている。

There never was a Swanee River and Stephen Foster was never within many miles of the Suwannee River, which, in a way, inspired his famous song. *That* river starts in Georgia near Okefenokee Swamp, (中略) and it empties into the Gulf of Mexico.

Foster wrote his song in Pittsburgh in 1851 and he set out, as professional songwriters sometimes do, to write another "river"

song. The first river he chose to immortalize was the Pee Dee, but the more he thought about that, the less he liked it. The Pee Dee, in case you care, runs through North and South Carolina. He then asked his brother, Morrison Foster, to suggest a better-sounding two-syllable name and he came up with Yazoo. Stephen decided that that sounded like a clinker, so he urged his brother to press on further in his atlas. He did and came up with Suwannee, which, since Stephen wanted only two syllables, was changed to Swanee, and musical history of a sort was made. Interestingly enough, though most people call the song “Swanee River,” Stephen Foster himself always referred to it as “Old Folks at Home.”⁽³⁾ (下線筆者)

「河の歌を作ろうと思立ったフォスターは、初案の Pedee にどうしても満足できず兄モリソンの助けを求めた。モリソンは Yazoo ではどうかと提案したが、それも気に入らず、二人でアメリカの地図を広げて調べていくうちに Suwannee を探し当てた。スティーブンは大いに満足し、2音節語にする必要上つづりを Swanee に変えたのである。」というモリス夫妻の『語源句源辞典』の記述はおそらく上述の2つの資料を調整することによって成立したものと思われる。

ここで注目したいのは、モリス夫妻も指摘しているとおり、この歌には“Old Folks at Home”（故郷の人々）という正式なタイトルとは別に“Swanee River”（スワニー河）という俗称が自然発生している点である。わが国の唱歌『敦盛と忠度』がいつしか『青葉の笛』にタイトルが変わり、童謡『靴が鳴る』がむしろ歌いだしの『お手々つないで』のほうで知られているのと軌を一にするのが興味深い。

なお、実在する Suwannee（サワニー）川の語源は San Juan(ee)（サンファンの崩れた形サンファニー）であるという。スワニー河をめぐる一連のエピソードにとどめをさすのはトム・バーナム著の『英語雑学辞典』に掲載されたこの河川についての幻滅的な現実の暴露であろう。

もしスティーブン・フォスターが実在の Suwannee 川を見たら、なんでこんな川を選んだのかとびっくりしたことだろう。全長250マイル（約402キロメートル）のうち、ジョージア州にあるのはわずか35マイルで、

しかもオケフェノキー湿原 (Okefenokee Swamp) があるので、川の水はまるでブラック・コーヒーのようだ。そこから200マイル (約322キロメートル) 以上曲がりくねってフロリダ州を流れ、メキシコ湾に注ぐ。流域のほとんどは湿地帯と密林地帯で、カミツキガメ (Snapping turtle) や水棲動物の棲息地であり、フォスターの歌のように豊かな畑や美しい農園をぬって流れているわけではない。⁽⁹⁾ (下線筆者)

この「暴露記事」を読むとかつて本多勝一氏とそのルポルタージュ『アラビア遊牧民』のなかに書いた『『月の砂漠』の夢と現実』の章を思い出す。大正12年に発表された加藤まさを作詞『月の砂漠』もまた砂漠の厳しい現実を知らない人が書いたこれはまた徹底したロマンチックな幻想の世界である。本多勝一記者は加藤まさをの詩とアラビアの砂漠の現実とを対比して、砂漠の自然の厳しさを世に知らしめたのであった。

現実のサバクは、王子と姫が二人でとぼとぼ旅をしたら、たちまちベドウィンに略奪されるだろう。おぼろに月がけぶるのは、猛烈な砂あらしが静まりかけるときぐらいだ。……⁽¹⁰⁾

おぼろにけぶる月の夜を金と銀との鞍を置いたラクダの背にまたがった王子と王女が果てしない砂漠を旅する光景は幻想としてはまことに美しいのだが、それは現実とはほど遠いものなのである。

ところでフォスターのこの歌には後日談とでもいうべきエピソードがある。ジョージ・ガーシュイン George Gershwin (1898-1937) の最初のヒット曲で、歌手アル・ジョルソンの代表的なヒットナンバーとなったポピュラー・ソング “Swanee” (アービング・シーザー作詞) は明らかにこの歌を下敷きにしている。歌詞の一節には、

Swanee, Swanee, I am coming back to Swanee.
Mammy, Mammy, I love the old folks at home.

があり、“I love the old folks at home.” の部分は明らかに “far from the old folks at home.” から modify しての借用であるが、実は歌詞ばかりでなくメロディーまでもそっくりそのまま元歌からの借用なのである。しかもレコードや伝記映画『ジョルソン物語』で聴くと、皮肉な

ことにはジョルスンもしきりに指笛を使って鳥のさえずりを表現しながら、スワニーの流域の美しさを讃えるかのごとくに歌っていることがわかる。

元来北部人であり、ピッツバーグでソングライターとして名をあげたフォスターであったが、やがてニューヨークに移住する。彼がその作品の初演権に関する契約を結んでいた Christy's Minstrel の本拠地であったからである。彼が自作の楽譜出版に先立って、当時の代表的な minstrel・ショー楽団であるクリスティーズ・ minstrel に新曲を初演させる契約を結んでいたのは、楽譜の売れ行きをより確実なものにするためであった。つまり南部をよく知らないフォスターがたてつけに南部を舞台とする歌を書きつけたのは minstrel・ショーのための歌を書く必要があったためなのである。実際に南部に行ったこともないフォスターが南部を彷彿させる数々の名曲を残しているのはやはり天才のなせる技としか言いようがない。

注

- (1) Eric Partridge, *A Dictionary of Catch Phrase*, Routledge & Kegan Paul, 1984
Eric Partridge, *A Dictionary of Slang and Unconventional English, Vol.II: The Puppement*, Routledge & Kegan Paul, 1979
- (2) *Comics As Culture* テネシー州立大学マーティン校附属図書館蔵書
- (3) William and Mary Morris, *Morris Dictionary of Word and Phrase Origins*, Harper & Row, 1977
- (4) Robert James Waller, *The Bridges of Madison County*, Warner Books Inc., 1992
- (5) Ray Bradbury, *The Golden Apples of the Sun*, Bantam Books Inc. 1970
- (6) Ebenezer C. Brewer, *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable, Revised by Ivor H. Evans*, Cassel, 1977
- (7) Joseph T. Shipley, *The Origins of English Words*, The Johns Hopkins University Press, 1984
- (8) *Stephen Foster, America's Troubadour* に引用されている。テネシー州立大学マーティン校附属図書館蔵書
- (9) トム・バーナム著、堀内克明編訳、『英語雑学辞典』、研究社、1982
- (10) 本多勝一、『アラビア遊牧民』、講談社、1980

Word and Phrase Derivations from Prose Work and Verse

Yoji Kawano

This is a combination of episodes given to words and phrases which derive from prose work and verse, and consists of six chapters arranged in alphabetical order: *After you, my dear Alphonse* is a catch phrase which originated in the old comic strip by Frederick Burr Opper which appeared in Sunday newspapers. Shirley Jackson, the author of "The Lottery", named one of her short story just that. *Catbird seat* is a southern slang picked up and made popular by Red Barber, a famous sportscaster, and made still more popular by the humorist James Thurber. One of his masterpieces is titled "The Catbird Seat." *The golden apples of the sun* is the last line of early Yeats' poem, "The Song of Wandering Aengus." One of Ray Bradbury's collection of short stories took the title from the line, and Robert James Waller quoted lines from the poem in his best-seller novel, *The Bridges of Madison County*. *Many-splendored thing* is taken from Francis Thompson's poem, "The Kingdom of God." The phrase became the title of a novel as *A Many-splendored Thing*, and that in turn became the title of a film as *Love Is A Many-splendored Thing*. *Matilda* 'mighty in battle' was originally a female name of the Germanic language which greatly suffered deterioration of meaning. It sometimes means a wanton woman. Harry Belafonte's favorite song *Matilda* is a good example. And just one more: *Swanee* is the name of a fictional river Stephen Foster invented. The real name of the river is the Suwannee in Florida, and there is no such plantation as Foster sang in the river basin. Further, the color of its waters is like that of black coffee because the river issues from Okefenokee Swamp in Georgia.